

コンパクト対称空間の対蹠集合

田中 真紀子

(東京理科大学理工学部)

OCAMI 談話会

2015年12月16日

講演の内容 (田崎博之氏との共同研究)

1. 準備

2. 対称 R 空間の対蹠集合

3. コンパクト **Lie**群の対蹠集合

4. $U(n)$, $SU(n)$, $O(n)$, $SO(n)$, $Sp(n)$ の極大対蹠部分群の分類

5. $U(n)$, $SU(n)$, $O(n)$, $SO(n)$, $Sp(n)$ の商群の極大対蹠部分群の分類

6. **Lie**環の自己同型群の極大対蹠部分群の分類

7. G_2 および $G_2/SO(4)$ の極大対蹠集合の分類

1. 準備

M : Riemann 多様体

M : Riemann 対称空間 $\stackrel{\text{def}}{\iff} \forall x \in M, \exists s_x$: 等長変換
s.t. $s_x^2 = \text{id}$, x は s_x の孤立不動点

s_x : x における 点対称

例 : ユークリッド空間 \mathbb{R}^n 、球面 S^n 、トーラス T^n

$S \subset M$: 対蹠集合 (antipodal set) $\stackrel{\text{def}}{\iff} \forall x, \forall y \in S$
に対して $s_x(y) = y$ が成立

対蹠集合 S が 大対蹠集合 (great antipodal set)

$\stackrel{\text{def}}{\iff} |S| = \max\{|A| \mid A \subset M \text{ 対蹠集合}\} =: \#_2 M$:

M の 2-number

例 (1) $M = \mathbb{R}^n$ $\{x\}$: 大対蹠集合 ($x \in \mathbb{R}^n$)

(2) $M = S^n$

$\{x, -x\}$: 大対蹠集合 ($x \in S^n \subset \mathbb{R}^{n+1}$)

(3) $M = \mathbb{R}P^n$

$\{\mathbb{R}e_1, \dots, \mathbb{R}e_{n+1}\}$: 大対蹠集合 (e_1, \dots, e_{n+1} は \mathbb{R}^{n+1} の **o.n.b.**)

(4) $M = T^n$ $\#_2 T^n = 2^n$

$I(M)$: M の等長変換群 $I(M)$ は M に推移的

M : 連結 \Rightarrow 単位連結成分 $G := I_0(M)$ が推移的

$M = G/K$ $K := \{g \in G \mid go = o\}$ ($o \in M$)

$Ko = o \Rightarrow K \curvearrowright T_oM$ 線形イソトローピー作用

対称 R 空間はコンパクト型 **Riemann** 対称空間 G/K の
線形イソトローピー軌道として実現されるコンパクト **Rie-**
mann 対称空間

コンパクト型 **Hermite** 対称空間は対称 R 空間 (G/K が
コンパクト半単純 **Lie** 群の場合)

例: コンパクト **Lie** 群 $SO(n)$ 、 $U(n)$ 、 $Sp(n)$ 、**Grass-**
mann 多様体 $G_k(\mathbb{K}^n)$ ($K = \mathbb{R}, \mathbb{C}, \mathbb{H}$)、 S^n

対称 R 空間 \leftrightarrow コンパクト型 **Hermite** 対称空間の実形
二つの実形の交叉は対蹠集合 (T.-田崎 2012)

2. 対称 R 空間の対蹠集合

定理 1 (T.-田崎 2013)

対称 R 空間 M に対して次が成り立つ。

- (1) M の極大対蹠集合は大対蹠集合である。
- (2) M の大対蹠集合同士は $I_0(M)$ の元的作用で互いに写り合う。
- (3) M の大対蹠集合は **Weyl**群 W の軌道である。

対称 R 空間はコンパクト型 **Hermite**対称空間 $\hat{M} = \hat{G}/\hat{K}$ の実形 $M = F(\tau, \hat{M})$ (τ は \hat{M} の対合的反正則等長変換) であり、 W は \hat{G} の対合的自己同型 $I_\tau : g \mapsto \tau g \tau^{-1}$ が定める対称対の **Weyl**群である。

対称 R 空間ではないコンパクト **Riemann** 対称空間の対蹠集合についてはよくわかっているとは言えない。

例：有向実 **Grassmann** 多様体 $\tilde{G}_k(\mathbb{R}^n)$ ($2k \leq n$) は、 $\tilde{G}_1(\mathbb{R}^n) = S^{n-1}$ 、 $\tilde{G}_2(\mathbb{R}^n) = Q_{n-2}(\mathbb{C})$ (複素 2 次超曲面) で対称 R 空間である。 $k \geq 3$ のとき対称 R 空間ではない。

(田崎 2013) 階数 $k = 3, 4$ の場合の $\tilde{G}_k(\mathbb{R}^n)$ の極大対蹠集合の分類

コンパクト **Lie**群の商群は一般には対称 R 空間ではない。

3. コンパクト Lie 群の対蹠集合

コンパクト Lie 群 G \exists 両側不変 Riemann 計量

\Rightarrow コンパクト Riemann 対称空間

$x \in G$ における点対称 $s_x(y) = xy^{-1}x$ ($y \in G$)

$1 : G$ の単位元

$$s_1(y) = y \Leftrightarrow y^2 = 1$$

$x^2 = 1, y^2 = 1$ のとき $s_x(y) = y \Leftrightarrow xy = yx$

$1 \in S \subset G$: 極大対蹠集合 \Rightarrow 部分群

$$S \cong \mathbb{Z}_2 \times \cdots \times \mathbb{Z}_2 \text{ (} r \text{ 個の積)} \quad |S| = 2^r$$

$r \geq \text{rank}(G)$ ($r > \text{rank}(G)$ も起こり得る)

4. $U(n), SU(n), O(n), SO(n), Sp(n)$ の極大対蹠部分群の分類

$$\Delta_n := \left\{ \begin{bmatrix} \pm 1 & & \\ & \cdots & \\ & & \pm 1 \end{bmatrix} \right\} \subset O(n)$$

$$\Delta_n^\pm := \{g \in \Delta_n \mid \det g = \pm 1\}$$

$O(n), U(n), Sp(n)$ の極大対蹠部分群は Δ_n に共役である。
 $SO(n), SU(n)$ の極大対蹠部分群は Δ_n^+ に共役である。
(行列の対角化の理論からわかる。)

5. $U(n), SU(n), O(n), SO(n), Sp(n)$ の商群の極大対蹠部分群の分類

$U(n)$ の中心 $Z \stackrel{\text{id}}{=} \{z \in \mathbb{C} \mid |z| = 1\}$

$\mathbb{Z}_\mu \subset Z$: 位数 μ の巡回部分群 $\Rightarrow U(n)/\mathbb{Z}_\mu$: $U(n)$ と局所同型なコンパクト **Lie** 群

$SU(n)$ の中心 $\stackrel{\text{id}}{=} \{z \in \mathbb{C} \mid z^n = 1\} \cong \mathbb{Z}_n$

$\mathbb{Z}_\mu \subset \mathbb{Z}_n$: 位数 μ の巡回部分群 ($\mu : n$ の約数)

$\Rightarrow SU(n)/\mathbb{Z}_\mu$: $SU(n)$ と局所同型なコンパクト **Lie** 群

$$D[4] := \left\{ \begin{bmatrix} \pm 1 & 0 \\ 0 & \pm 1 \end{bmatrix}, \begin{bmatrix} 0 & \pm 1 \\ \pm 1 & 0 \end{bmatrix} \right\} \subset O(2)$$

$D[4]$: 二面体群 正四角形を不変にする

$$D^\pm[4] := \{g \in D[4] \mid \det g = \pm 1\}$$

n : 自然数 $n = 2^k \cdot l$, l : 奇数

$0 \leq s \leq k$ に対して

$$C(s, n) := D[4] \otimes \cdots \otimes D[4] \otimes \Delta_{n/2^s} \subset O(n)$$

(s 個の $D[4]$ と $\Delta_{n/2^s}$ のテンソル積)

定理 2 (T.-田崎) μ : 自然数

\mathbb{Z}_μ : $U(n)$ の中心の μ 次巡回部分群

θ : 1 の原始 2μ 乗根

$\pi_n : U(n) \rightarrow U(n)/\mathbb{Z}_\mu$: 自然な射影

$U(n)/\mathbb{Z}_\mu$ の極大対蹠部分群は次のいずれかに共役である。

(1) n または μ が奇数の場合

$$\pi_n(\{1, \theta\}C(0, n)) = \pi_n(\{1, \theta\}\Delta_n)$$

(2) n かつ μ が偶数の場合

$$\pi_n(\{1, \theta\}C(s, n)) \quad (0 \leq s \leq k)$$

ただし、 $(s, n) = (k - 1, 2^k)$ の場合を除く

注意 $\Delta_2 \subsetneq D[4]$ より

$$C(k - 1, 2^k) = D[4] \otimes \cdots \otimes D[4] \otimes \Delta_2$$

$$\subsetneq D[4] \otimes \cdots \otimes D[4] \otimes D[4] = C(k, 2^k)$$

$C(k - 1, 2^k)$ は極大ではない

定理 3 (T.-田崎) $\mu : n$ の約数

$\mathbb{Z}_\mu : SU(n)$ の中心の μ 次巡回部分群

$\theta : 1$ の原始 2μ 乗根

$\pi_n : SU(n) \rightarrow SU(n)/\mathbb{Z}_\mu$: 自然な射影

$SU(n)/\mathbb{Z}_\mu$ の極大対蹠部分群は次のいずれかに共役である。

(1) n または μ が奇数の場合

$$\pi_n(\Delta_n^+)$$

(2) n かつ μ が偶数の場合

(a) $k = 1$ のとき

$$\pi_n(\Delta_n^+ \cup \theta \Delta_n^-), \quad \pi_n((D^+[4] \cup \theta D^-[4]) \otimes \Delta_l)$$

ただし、 $n = \mu = 2$ のときは $\pi_2(\Delta_2^+ \cup \theta \Delta_2^-)$ を除く

(b) $k \geq 2$ のとき $\mu = 2^{k'} \cdot l'$, $l' : \text{奇数}$

(b1) $k' = k$ ならば

$$\pi_n(\Delta_n^+ \cup \theta \Delta_n^-), \quad \pi_n(C(s, n)) \quad (1 \leq s \leq k)$$

ただし、 $(s, n) = (k - 1, 2^k)$ の場合を除く

(b2) $1 \leq k' < k$ ならば

$$\pi_n(\{1, \theta\} \Delta_n^+), \quad \pi_n(\{1, \theta\} C(s, n)) \quad (1 \leq s \leq k)$$

ただし、 $(s, n) = (k - 1, 2^k)$ の場合を除き、 $n = 4$ の

場合はさらに $\pi_4(\{1, \theta\} \Delta_4^+)$ を除く

注意 $\Delta_4^+ = \Delta_2 \otimes \Delta_2 \subsetneq D[4] \otimes D[4] = C(2, 4)$

$\pi_4(\{1, \theta\} \Delta_4^+)$ は極大ではない

$O(n)$ の中心 = $\{\pm 1_n\} \cong \mathbb{Z}_2$

$O(n)/\{\pm 1_n\}$ は $O(n)$ と局所同型なコンパクト **Lie** 群

n が奇数 \Rightarrow 連結成分の個数は 2

n が偶数 $\Rightarrow SO(n)$ と同型

$SO(n)$ の中心は n が偶数のとき $\{\pm 1_n\}$ 、 n が奇数のとき $\{1_n\}$

n が偶数のとき、 $SO(n)/\{\pm 1_n\}$ は $SO(n)$ と局所同型なコンパクト **Lie** 群

$Sp(n)$ の中心 = $\{\pm 1\} \cong \mathbb{Z}_2$

$Sp(n)/\{\pm 1_n\}$ は $Sp(n)$ と局所同型なコンパクト **Lie** 群

四元数の標準的な基底の ± 1 倍の全体:

$$Q[8] := \{\pm 1, \pm i, \pm j, \pm k\}$$

定理 4 (T.-田崎) 自然数 n を2の冪 2^k と奇数 l の積 $2^k \cdot l$ に分解する。

(I) $O(n)/\{\pm 1_n\}$ の極大対蹠部分群は次のいずれかに共役である。

$$\pi_n(C(s, n)) \quad (0 \leq s \leq k)$$

ただし、 $(s, n) = (k - 1, 2^k)$ の場合を除く。

(II) n が偶数のとき、 $SO(n)/\{\pm 1_n\}$ の極大対蹠部分群は次のいずれかに共役である。

(1) $k = 1$ の場合

$$\pi_n(\Delta_n^+), \pi_n(D^+[4] \otimes \Delta_l)$$

ただし、 $n = 2$ の場合は $\pi_2(\Delta_2^+)$ を除く。

(2) $k \geq 2$ の場合

$$\pi_n(\Delta_n^+), \pi_n(C(s, n)) \quad (1 \leq s \leq k)$$

ただし、 $(s, n) = (k - 1, 2^k)$ の場合を除き、 $n = 4$ の場合はさらに $\pi_4(\Delta_4^+)$ を除く。

(III) $Sp(n)/\{\pm 1_n\}$ の極大対蹠部分群は次のいずれかに共役である。

$$\pi_n(Q[8] \cdot C(s, n)) \quad (0 \leq s \leq k)$$

ただし、 $(s, n) = (k - 1, 2^k)$ の場合を除く。

6. Lie環の自己同型群の極大対蹠部分群の分類

G : 連結コンパクト半単純Lie群

Z : G の中心 (G の離散部分群)

$G/Z \cong \text{Inn}(\mathfrak{g})$ (G のLie環 \mathfrak{g} の内部自己同型群)

$\text{Inn}(\mathfrak{g})$ の極大対蹠部分群 \rightsquigarrow \mathfrak{g} の対合的内部同型で互いに可換なものがどれだけ多く取れるか

定理3、定理4 (II)、(III) は $\mathfrak{g} = \mathfrak{su}(n), \mathfrak{so}(n), \mathfrak{sp}(n)$ の $\text{Inn}(\mathfrak{g})$ の極大対蹠部分群の分類を含む。

$\text{Aut}(\mathfrak{g})$: \mathfrak{g} の自己同型群 ($\text{Inn}(\mathfrak{g})$ は単位連結成分)

自然な射影 $G \rightarrow G/Z$ を Ad で表す。

定理5 (T.-田崎) 自然数 n を2の冪 2^k と奇数 l の積 $2^k \cdot l$ に分解する。

(I) $\tau : \mathfrak{su}(n) \rightarrow \mathfrak{su}(n) ; X \mapsto \bar{X}$ とする。 $\text{Aut}(\mathfrak{su}(n))$ の極大対蹠部分群は次のいずれかに共役である。

$$\{e, \tau\} \text{Ad}(C(s, n)) \quad (0 \leq s \leq k)$$

ただし、 $(s, n) = (k - 1, 2^k)$ の場合を除く。

(II) $\text{Aut}(\mathfrak{so}(n))$ の極大対蹠部分群は次のいずれかに共役である。

$$\text{Ad}(C(s, n)) \quad (0 \leq s \leq k)$$

ただし、 $(s, n) = (k - 1, 2^k)$ の場合を除く。

(III) $\text{Aut}(\mathfrak{sp}(n))$ の極大対蹠部分群は次のいずれかに共役である。

$$\text{Ad}(Q[8] \cdot C(s, n)) \quad (0 \leq s \leq k)$$

ただし、 $(s, n) = (k - 1, 2^k)$ の場合を除く。

7. G_2 および $G_2/SO(4)$ の極大対蹠集合の分類

例外型 **Lie** 群 G_2 : **Cayley** 代数の自己同型群

G_2 はコンパクト単連結、 G_2 の中心 = $\{e\}$

$$F(s_e, G_2) = \{g \in G_2 \mid g^2 = e\} = \{e\} \cup M_1^+$$

$$M_1^+ \cong G_2/SO(4) \quad o \in M_1^+$$

$$F(s_o, M_1^+) = \{o\} \cup M_{1,1}^+$$

$$M_{1,1}^+ \cong (S^2 \times S^2)/\mathbb{Z}_2$$

ここで、 $x \in \mathbb{Z}_2 = \{\pm 1\}$ は $x \cdot (p, q) = (xp, xq)$ により $S^2 \times S^2$ に作用

$$\pi : S^2 \times S^2 \rightarrow (S^2 \times S^2)/\mathbb{Z}_2 \quad \text{自然な射影}$$

$$[p, q] := \pi(p, q) \quad ((p, q) \in S^2 \times S^2)$$

$e_1, e_2, e_3 : S^2 \times S^2$ の第一因子の S^2 の直交系

$f_1, f_2, f_3 : S^2 \times S^2$ の第二因子の S^2 の直交系

$(S^2 \times S^2)/\mathbb{Z}_2$ の極大対蹠集合は

$$A := \{[e_1, \pm f_1], [e_2, \pm f_2], [e_3, \pm f_3]\}$$

と合同である。

A に対応する $M_{1,1}^+$ の極大対蹠集合を $A_{1,1}$ とする。これらの記号のもとで次が成り立つ。

定理6 (T.-田崎)

(1) $G_2/SO(4)$ の極大対蹠集合は $\{o\} \cup A_{1,1}$ に合同であり、その元の個数は7である。

(2) G_2 の極大対蹠部分群は $\{e, o\} \cup A_{1,1}$ に共役であり、その位数は8である。

(3) $\text{Aut}(\mathfrak{g}_2)$ の極大対蹠部分群は $\text{Aut}(\mathfrak{g}_2) = \text{Inn}(\mathfrak{g}_2) \cong G_2$ の同一視のもとで (2) で与えられる。